

大学博物館の可能性

— 展示表現への挑戦 —

東京大学総合研究博物館は、学内外に新しい展示空間を創造し続けている。間もなく新しい展示場もオープンするであろう。物を集め、理をもって学をなし、ついには美に挑む博物館。そこでわれわれは、学と美と人間をどう表現していくのだろうか？ 生命と形にとりつかれ、創造に熱狂するリーダーたちと、話を交わそう。

日時： 6月12日（日）13時30分から16時

会場： 東京大学農学部弥生講堂（一条ホール）

西野嘉章

（東京大学総合研究博物館館長）

「ご挨拶」

遠藤秀紀

（作家、東京大学総合研究博物館）

「特別展『生きる形』開催へ向けて」

命を宿した「形」を、観る者に呼吸してもらいたい。企画するのは「生きる形」展だ。そこで、脳内を去来する進化史絵巻を、どう空間に閉じ込め、疾駆させるか。その苦悩は、死体を前にメスを握って悶々とするこの日々に、すでに始まっている。

松岡象一郎

（スペシャルメイクアップアーティスト、東京大学総合研究博物館）

「繰り返す生命」

一つの命が生まれ、そしていずれ死んでいく。我々はこの行為を何万年も前から繰り返して来た。なぜ我々は子孫を残し、止まらない時と共に人生を繰り返すのだろうか。この疑問を自己の立体作品の中に求め、深い深淵へ答えを探し続ける様をぜひ共有して欲しい。

矢後勝也

（昆虫学者、東京大学総合研究博物館）

「表と裏の展示技法」

色彩や形の多様性・変幻性を持つ昆虫は、一見、人道的な様相をしていても、自然界の中では意味を持ちながら不思議と溶け込む。チョウはその代表的存在で、しかも翅の表裏で全く異なる色彩を持つものが少なくない。この自然美が造り出す表裏一体の進化史を同一標本で表現する展示技法に挑む。

山田昭順

（写真家、東京大学総合研究博物館）

「生々流転—『いのち』の航海記」

時間という大海原を、生と死の歴史を繰り返し航海してきた「いのち」は、生活環境に適応した機能的で美しい「形」を獲得した。私たちが便利に使っている「身体」も遠い旅の記憶を秘めている。私は人間の身体に限りない美しさを感じる。「人体の美」を探究することは「いのちの航海記」を読み解くようなものかも知れない。

佐々木猛智

（貝類学者、東京大学総合研究博物館）

「化石の生命史」

標本の形から生物が生きている時の姿を復元することは容易ではない。それが化石になればさらに困難である。石となった生物体の痕跡から、太古の生命を復元するために古生物学者は奮闘している。博物館の化石標本が古生物学の研究にどのように役立つのか近年の事例を紹介する。

※無料。参加申込み不要です。途中からでも自由にお聴き下さい。

主催：東京大学総合研究博物館

住所：東京都文京区本郷 7-3-1

電話：03-5841-2848

又は 03-5841-2802

